

<b>Title</b>	『とほすがたり』の<雪の曙>をめぐる諸問題
<b>Author(s)</b>	標, 宮子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 11(3): 271-286
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=583">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=583</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 『とほすがたり』の〈雪の曙〉をめぐる諸問題

標 宮子

### 一、問題提起

『とほすがたり』に仮名<sup>かめい</sup>で登場する「雪の曙」が西園寺実兼であることは、今や定説化され疑う余地はない。

実兼は作者後深草院二条より長ずること九歳、建長元年（一二四九）太政大臣藤原公相の三男として誕生した。母は家女房、大外記中原師朝の娘である。彼は文永四年（一二六七）父公相を、同六年に祖父実氏を亡くし、若くして関東申次の重責を担うことになった。その後朝廷と幕府の間に立ち、また持明院統・大覚寺統両統迭立という難局に直面して自らの立場を巧みに用い、皇位継承争いに介入しながら歴史の舞台で活躍を続けた。

一方、『とほすがたり』の主要人物の一人である〈雪の曙〉は、作品の巻頭から登場し、作者二条の愛情を後深草院と競いあい、果敢で行動的、しかも的確な判断力と行き届いた配慮により、女心を見事に捉える魅力的な人物として描き出されている。

歴史上の人物西園寺実兼が著名な政治家であり、作品に描かれた〈雪の曙〉像が実在の人物のイメージと齟齬しない為、実兼ないし〈雪の曙〉については大方の問題が決着したと見做されているのであろうか、近年取りあげられることが少ない様に感じられる。しかし『とほすがたり』における〈雪の曙〉をめぐる問題は、まだまだ解決しなければならぬ問題は少なくない。

一例を挙げると呼称の問題がある。従来『とほすがたり』は愛人を臙化・隠匿する為に場面によって呼び名を使い分け、公人としては官職名や実名を、私的立場では仮名を使用するといわれてきた。しかしこの指摘は「有明の月」は言うまでもなく、「雪の曙」についても、必ずしも正鵠を得ていない。と言うのは、作者は愛人西園寺実兼を呼ぶ場合、〈雪の曙〉という統一的な呼称を用いようとはしなかった。実は「雪の曙」という呼称は、巻二の極めて限定された場面に6例のみ使用されているに過ぎない。はじめにその事実を指摘しておく必要がある<sup>1</sup>。本稿において二種類の括弧を使い分けるのは、実際に作者がその呼称を用いた場面と、作者自身が使用しているわけではないが、

愛人実兼と同定されている箇所との区別を明確にする為である。「雪の曙」は前者（作者の命名になる巻二の6例）、〈雪の曙〉は後者（雪の曙）と同定されている人物）を意味するものとして、使い分けるとすることとする。もし「雪の曙」の呼称が作者によって極めて意識的に限定的に使用されているのであるならば、作品全体を貫く〈雪の曙〉像を考察しようとする事自体、果たして厳密には可能と言えるのか、という問題提起もあり得よう。

この他にも起筆部に登場する所謂〈雪の曙〉と作者の関係が、いかなるものであったか。また作者と〈曙〉の間に生まれた女子は昭訓門院なのか。あるいは前半宮廷編の始めから終わりまで、重要な役割を果たしてきた〈雪の曙〉が、後半巻四、五にふつりと姿を見せなくなるのは何故か、等々、争点のまま残された問題は少なくない。

本稿ではいささか断片的ながら、これら〈雪の曙〉をめぐる未解決の問題を取り上げ、巻一から順次考察を加えていく。

## 二、巻一の〈雪の曙〉像——三年の恋と「新枕」——

はじめに断った括弧の区別から明らかなように、作者は巻一において〈雪の曙〉という呼称を一度も用いていない。その為この巻に登場する愛人が〈曙〉か否か、という人物同定の論議がしばしば醸し出されてきた。

一体作者は巻一の〈雪の曙〉像をどのように描こうとしていたので

あろうか。

ここでは当初はプロットを忠実に辿り、テキストの語る作品スタート時点での二条と〈雪の曙〉の関係を読み解き、次いで作者が巻一の〈雪の曙〉像において拘った「新枕」という歌語に注目し、その言葉によって喚起される〈曙〉像のイメージを明らかにして、この課題に迫ることにする。争点になっている人物同定の問題も併せ考えたい。

\*

まず巻一の〈雪の曙〉は、巻頭の後深草院の求愛に重ね合わせるかのように、作品の起筆部分から登場する。文永八年（一二七二）、元旦の儀式を終えて局に下がった二条の許に豪華な装束一揃えが届けられた。その贈り主が〈雪の曙〉である。つまり作品冒頭の後深草院と二条の父親中院（久我）雅忠との約諾に引き続いて、その二人の密約の意味さえ定かでなかった二条の前に、〈曙〉はいちはやく自分の意思を表明したのである。

翼こそ重ねることのかなはずと着てだに馴れよ鶴の毛衣

（巻一 4頁）

「貴方と比翼の契りをおかわすことはかなわなくとも」という歌の言葉と裏腹に、「着てだに馴れよ」と高価な衣裳に託す彼の並々ならぬ思いは明白である。

こうして『とはすがたり』は、院と〈曙〉、二人の男性から同時に思いを寄せられる求婚場面から語り始められる。

「いと思はずにむつかしければ、返しつかはずに」、贈り主の意図を察して「思いがけないことで煩わしさを感した」という二条の反応には、いきなり突き付けられた求愛という現実にとまじろぐ、あどけない乙女の戸惑いが表現されている。

「よそながら馴れてはよしや小夜衣いと、袂の朽ちもこそすれ  
思ふ心の末むなしからずは」  
(巻一 4頁)

二条は返却する衣裳に文を添えた。恋に恋する年頃の微妙な心の動きと、幼くも恋の駆け引きを企む乙女の心理が見事に描かれた場面である。恋に恋する年頃は、今この時決断を迫る求婚の現実には戸惑いを覚えながら、憧れとしての恋には違和感を抱いてはいない。「思ふ心の末むなしからずは」とは、こうした男の求愛を現実として受け止めることを回避しようと試みながら、決して贈り主を拒絶しているのではない、むしろ心惹かれる存在であるとメッセージを送り、近い将来に答えを持ち越そうと企図する幼くも巧みな恋の駆け引きと言えよう。しばらくして包みが再度届けられた。そこには〈曙〉の次の歌が添えられていた。

契りおきし心のすゑの変はらずはひとり片敷け夜半の狭衣

(巻一 4頁)

この時贈られた〈曙〉の和歌、特に「契りおきし」の解釈をめぐって、約束を交わした時期と内容について見解の別れる所である。大別

すると、①二人はこれ以前に将来を言い交わしていたとする説<sup>②</sup>、②すでに二人は親にも許され内祝言の契りを交わしていたと考える説<sup>③</sup>、「契りおきし」は、二条が衣裳を返した時の歌に添えた「思ふ心の末むなしからずは」を受けていると解する説<sup>④</sup>である。

これらの解釈の妥当性については後述することにして、プロットを追っていくと、

いづくへ又返しやるべきならねば、とゞめぬ。  
(巻一 4頁)

当初二条の心をよぎった煩わしいという思いが、〈曙〉の新たな手紙によつて氷解したのか、二条は再度届けられた衣裳をものはや返しはしなかった。

さて三日目のことである。後深草院御所は後嵯峨院の御幸を迎える。その時二条はこの衣裳を身に纏つて出仕した。自分の預かり知らぬ衣裳で身を装った娘を見て、父雅忠は院の心尽くしのプレゼントと勘違いするが、院の元旦の申し入れを考えると、雅忠の心の動きはごく自然であり、もつともな推察であつたと言えよう。またそのことにより贈られた衣裳が如何に求婚の意思表示に似つかわしい品であつたかが証明されよう。その時二条は咄嗟に〈曙〉の縁者であり、亡き母の縁<sup>ゆかり</sup>の人でもある「常盤井の准后」の名前を挙げて真の贈り主を秘め、高鳴る胸の鼓動を押さえながら、素知らぬ体を装うのであつた。

この父娘のやり取りは、前述の「契りおきし」の意味を探る上で示唆に富む箇所である。もし実際に二人の間に父の認めた約束が交わさ

れていたとするならば、彼女は父に〈曙〉からの衣裳の贈与を隠し立てする必要はさらさらない。まして②のすでに内祝言も済ましていたという解釈では、咄嗟の嘘が意味をなさなればかりか、作品展開の必然性と全く齟齬を来すことになる。つまり始め〈雪の曙〉から豪華な衣裳が届けられるとたじろぎ、一旦は拒絶の姿勢を取りながら、再度届けられるともはや拒まず、そして父には彼からの贈与を秘める。この娘心の微妙な心理は、父親公認の婚儀の約束が交わされている女の心情とは言えないであろう。いわんや新枕をすでに交わしていたとは考えられない。とすると①②の解釈はこの場面の父娘の会話と矛盾し、成り立たない。それに対して③の解釈はプロットの運びの上で妥当であり、しかも一旦は返却した衣裳を二度目には受け取り、更に身に纏うに至る二条の心の変化を説明し納得させるものがある。つまり③の解釈は、過去に交わした約束を持ち出す①②と異なり、先に返歌した際の二条の「思ふ心の末むなしからずは」という言葉を受け止めて、その上で〈曙〉が新たな申し入れをなしたことになる。筆者は先に衣裳贈与をめぐる二条の言動には、男の求愛の意思表示を鋭く察知し、それに対する返答を将来に持ち越すことにより、目の前に迫る現実を憧れにすり替えようと算段した少女の駆け引きがあると述べた。〈雪の曙〉はその二条の意図を汲んで、「約束を下さったお心が行く末も変わらないのであるならば」、言い換えれば「あなたの気持ちは了解しました。今すぐ決断を下さずともよいのです」と、二人の合意を確認した上で結論を先に持ち越すことを了承したと告げている。こ

の新たな申し出を受けて、二条は再度届けられた衣裳を受け取り、法皇御幸に際して身に纏うに至っている。恋に憧れ、結婚をまだ現実的に受止めかねている娘心の機微と贅を巧みに表現した場面と言いえよう。後述するが、雅忠没後、二条は〈雪の曙〉から父が娘を彼に託すつもりであったと知らされる。恐らくそうした父の目論見が後深草院の申し入れにより改変を余儀なくせられ、その経緯がこの段階では娘には充分伝えられていなかったということであろう。

『とほすがたり』の起筆部には、作者二条の束の間の少女時代の初々しい思い出と、思いも寄らず同時に二人の男性から心寄せられ、波乱にとんだ人生の幕が開かれた様子が描き出されている。作者は院と〈曙〉、二人の間を振幅大きく揺れ動く己の心と、にもかかわらず後深草院との関係を逃れ得ぬ契りであったと確認していく心の軌跡を、この後丁寧に通っていく。

\*

さて話は翌年文永九年、父雅忠の没後のことである。後深草院の皇子を懐妊し、父の喪に服して里住みする二条の許に〈雪の曙〉が忍び込み、二人ははじめて契りを交わした。

⑤ 実はこの場面では登場人物が〈曙〉その人か否か、争点になっている。まず九月十日頃に二条を弔問した人物と、十月十日あまりに「心のほかの新枕」を交わした人、更にその翌日『源氏物語』の夕顔の宿りさながら、心暖かくもがさつな乳人一家の喧騒の下に忘れ難い一夜を共にした人物、この三場面に登場する男性が同一人物か、見解が分

かれている。作者が巻一に登場する〈雪の曙〉に統一的な呼称を与えなかったこと、更に場面により敬語の使用状況が異なり印象の相違があることが、主たる原因と考えられよう。

筆者は三場面は一繋がりのものでして描かれていると考える。まず第一の場面の弔問客を「日を隔てず……弔ひし人」(31頁)と言い、そのお使いを「檜皮の狩衣着たる侍、文の箱を持ちて、中門のほどにたゞずむ。彼よりの使ひなりけり」(31〜32頁)と記す。そして第二の場面の最初に「十日余りの頃にや、又使ひあり」(33頁)と記し、前回と同じ人物が再度使いを遣わしたと言う。そしてその使いの口上(あるいは託された文)によると、その主人は「日を隔てずも申たきに……心のほかなる日数積もる」(33頁)と前回の弔問から心ならずも日の過ぎてしまった言い訳を述べている。ここから第一の場面の弔問客と第二の場面の「心のほかの新枕」の人は同一であると言うことが出来よう。次にその翌日に訪れた第三の場面の人は「暮るれば、今宵はいたく更かさでおはしたるさへ」(35頁)とあり、前日「新枕」を交わした人物が宵の口から早々訪れたという場面設定であることは間違いない。

にも拘らず三者の同一性に疑念が差し狭まれるのは、第二の場面に突出して多用される敬語のためである。この点についてはすでに論じたことがあるので、結論だけを記しておく。二条は予想だにしていなかった〈雪の曙〉の訪れを受け、心ならずも契りを交わしてしまった心の高ぶりを緊張感あふれる改まった文体として表現しようとしたの

ではないだろうか。敬語の多用は二条と男の間に距離を生み、改まった雰囲気、馴れ合いでない緊張感を漂わせる。皇室の祖先神である「御裳濯河の神」を引き合いに出し、寝所を「夜の御座」と述べて、自分が上皇の思われ人であることを殊更に強調するのも、この場面における緊迫感を高め、張り詰めた空気を表現しようとした作者の同じ意図であろう。

さて、筆者が本稿において「心のほかの新枕」の相手を〈雪の曙〉と主張するもう一つの理由は、「新枕」という語が有する文学的背景である。二条は〈曙〉を巻三においても「さしも新枕とも言ひぬべく、かた身に浅からざりし心ざしの人」(122頁)と呼び、「新枕」という言葉に特に強い拘りを示している。何故〈雪の曙〉と「新枕」が結びつけられるのか。歌語としての「新枕」を調べると、巻一における〈雪の曙〉の人物造型が明確になり、翻って巻頭の二条と〈曙〉、二人の関係を作者がどのように描出しようとしていたか、その意図が一層明瞭になる。以下にその理由を述べようと思う。

いずれの注釈にも触れられていないが、「新枕」は歌語としては、「初逢恋」の意味よりも、「三年を待ちわびて、あるいは三年を経て、その男女が初めて交わす契り」という内容で詠まれるケースが多いことを指摘したい。その文学的源泉は、『伊勢物語』二十四段にある。

『新編国歌大観』の第一巻から第五巻に載る「にひまくら」の用例36例中、21例が次に引用する『伊勢物語』の①歌を踏まえて、「三年」と結び付けられて詠まれている(そのうち11例は繰り返し採られた重

複歌である)。因みに古き時代には「初逢恋」は「にひたまくら」として詠まれることが多い。また時代が下り『新編国歌大観』第六巻の『菊葉集』や『題林愚抄』になると、「初逢恋」の用例が急増する(『菊葉集』6例、『題林愚抄』5例)。この傾向は勅撰集においても等しく、『新編国歌大観』第一巻も『統千載集』以降に「初逢恋」の用例が現れるが、「とはすがたり」以前には見出せない(『統千載集』2例、『新後拾遺集』2例)。

以下に「三年」と結び付けられて詠まれた「新枕」の用例を紹介しよう。

①あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそにまくらすれ

〔伊勢物語〕二十四段

これは、京に上った男を待ちわびた女が、三年の経過を待って、懇ろに言い寄る別の男と逢瀬を約束する。するとその当日、初めの男が立ち帰り女の許に現れたので、女は戸を閉ざしたままで歌を差出す、その歌である。これを見て男は立ち去り、女は後を追うが追いつかず、最後は焦れ死んでしまう。

この悲恋が後世の歌人達の心を動かしたのであろう。『伊勢物語』に因むと思われる歌が数々詠まれている。

②みとせまで待ちつる恋のしるしなくあかしもはてぬ新枕かな

〔林葉和歌集〕八〇二

③帰りはたがうらむべきことならむ三とせもまたぬ新枕をば

〔林葉和歌集〕九〇〇

④忘れずよみとせの後のにひ枕さだむばかりの月日なりとも

〔拾遺愚草〕二五九四

⑤いまさらにかがはすべき新まくら年の三とせはまちわびぬとも  
〔二条院讃岐集〕五五

②③は平安末期の歌僧俊恵の自撰家集『林葉和歌集』に載る歌である。それぞれ「不通夜恋公通卿会」「不誤被怨恋」の題の下に詠まれている。

④は「寄枕恋」と題した藤原定家の歌である。また⑤は二条天皇に出仕した源頼政の女、二条院讃岐の歌である。

①の『伊勢物語』の歌は定家の④と並んで『統古今和歌集』に採られ、更に顕昭の『袖中抄』に、また『俊頼髓脳』には「むばたまの年のやとせ」と改変されて載る。また宝治二年(一二四八)初撰、同三年改纂の『万代和歌集』には、「みとせ」と「新枕」を詠んだ歌三首が続き、その第一首として採られている。まず二六五五番歌として「みとせまでおとせざりけるをとこのまできたりけるに」という詞書で、よみ人しらずとして①歌が載り、続けて「かれがれになりにける女の人にまたものいふをききてつかはしける」という詞書を付し、権大納言実国の歌が続く(二六五六)。

⑥ちぎりしをみとせまでこそまたざらめいつしかなりやにひまくらす

そして更に二六五七番歌、「恋の心を」として二条院讃岐の⑤の歌が採られている。

また④の定家の歌は『光明寺入道撰政家十首歌合』に、更に『続古今和歌集』と『題林愚抄』には初句を「わするなよ」と改変されて採られ、⑤は『続千載和歌集』『歌仙落書』『題林愚抄』にも採録されている。このようにこれらが繰り返し取られたことにより、院政期から中世にかけて「新枕」が「三年を待ちわぶる恋」或いは「三年を待ちつる恋」として定着し、歌人達に愛用されていたことが判明する。

更にこのモチーフは二条の一族久我家の人々の好むところであったことにも注意を払いたい。例えば二条の曾祖父通親は、『千五百番歌合』において千一番目に藤原有家（左）に対して勝ちを得ているが、その理由がまさにこの『伊勢物語』二十四段の歌を想起させたということであった。

⑦みとせまでつがひなくともをしどりのうきねのところにひ枕す  
な

（中略）いせものがたりの、ただこよひこそにひ枕すれと  
いふ歌おもひいでられ侍りてをかしく、かち侍りなん

〔千五百番歌合〕 千一番 右

更に通親の祖父に当たる雅定（彼は具平親王から四代の後胤である）も、①を踏まえた歌を詠み、『千載和歌集』に採られ（九一七）、それは更に『今鏡』にも引かれている。

花園左大臣家に侍りける女、伊予と申しけるに、まだ中納言など申しけるころ、物申しわたりけるを、かれがれになりければ、おもひやたえにけん、前山城守なりけるものに物申すとききて、いひつかはしける

中院右大臣

⑧まことにやみとせもまたでやましろのふしみの里にひ枕する  
かくいひて侍りければ、あひなくかのをとこにあはず  
なんなりにけるとなん

この雅定の歌は、他の用例が『伊勢物語』を受けて「新枕」と「みとせ」との結び付きを強調しているのに対して、もう一つの側面である「別の男性と交わす初めての契り」の意味を浮き彫りにしている点で、特に注目したい。

作者二条は、「梁園八代の古風」（巻二 108頁）、「竹園八代の古風」（巻五 235頁）と村上天皇の皇子具平親王の子孫であることを誇りにし、和歌の道に深く心寄せていた。そして『新後撰集』撰進に際して父の詠が漏れた事を歎き、雅忠は『続古今集』以来代々の作者であると述べ、父方、母方両祖父の勅撰入集歌を披露して、いず方につけても和歌の道でないがしろにされるべき家柄でない事を強調している。それ故雅定の歌や通親のエピソードは、作者のよく知るところであつたに違いない。

それ故（雪の曙）と二条の恋は、古歌の伝統を踏まえている「新



枕」の語が似つかわしい恋、それは〈曙〉にとつては「三年越しの恋」あるいは「三年を待ちわぶる恋」であり、二条にとつてはとりわけ中院雅定歌を意識する恋、つまり「三年も経たないうちに院以外の男性と初めて交わす契り」を意味している。とすると、卷三において二条が〈雪の曙〉を「さしも新枕とも言ひぬべく、かたみに浅からざりし心ざしの人」と定義した真意は、彼が「自分にとつて初めての人とも言い得る程に互いに愛し合つてきた人」というところに強調があるのでなく、「あの『伊勢物語』や古歌で詠われた三年越しの「新枕」ともいうべき、互いに浅からぬ思いを寄せあつてきた人」の意になるであろう。

この他作者が実際に眼にしたかどうか確認しがたいが、『皇太后宮大進集』の一連の和歌（二六一―一九）が、『とほすがたり』と用語も心境も極めて近いことを指摘しておきたい。

あひてのちおもひをいふ

⑨ みとせまでうらみてすぎしむくひとてあすよりつらき心あるな

よ (一六)

⑩ いかがせん心の外のにひまくら猶このたびはゆめになしてよ

よ (一七)

この歌をききて法印静賢のもとに

⑪ むまたまのゆめはふたたびみずやとて我がやどにまたにひまくらせよ (一八)

かへし

⑫ うつつだにさだめなきよをにひまくらさのみはいかがゆめになすべき (一九)

この『皇太后宮大進集』のキー・ワードは「みとせ」「新枕」「夢」の三語である。とりわけ「心の外の新枕」と「夢」は『とほすがたり』と共通し、二つの世界は響き合う。『大進集』の一六番歌には「新枕」は用いられていないが、三年越しに二条を思い続けた〈曙〉の心境を代弁するような内容が詠われている。また一七番歌は情交の相手に「心の外の新枕」を「夢になしてよ」と懇願する、いわば二条の心境歌である。もし二条がこの作品を読んでいたとするならば、当事者二人の間で完結している『大進集』の世界に対して、『とほすがたり』では、同じ語句を使用して情事が後深草院に露見する事を恐れており、二人の男性の間で揺れ動く二条の半生に相応しく、プロットの更なる展開が図られているとみることができよう。

\*

右に得られた結論を踏まえて再度人物同定の論議に立ち返ると、第一の場面で弔問客が、

一年の雪の夜の九献の式、「常に逢見よ」とかやも、せめての心ざしとおぼえし (三十一頁)

と、父雅忠との会話を二条に伝え、第二の場面で「新枕」の人が

年月の心の色を、たゞのどかに言ひ聞かせん (34頁)

と口説くのは、彼にとり二条との関係が三年<sup>みとせ</sup>を待ちわびた恋である為である。それ故この三場面は、一繋がり<sup>つな</sup>の出来事として語る語り手の叙述という外枠からだけでなく、三年<sup>みとせ</sup>の間二条に思いを寄せ続けた男という人物造型の内実からも、同一人物と断定できよう。

このようにみてくると、巻五において作者が、遊義門院の八幡参拝の折に奉幣役を務めた西園寺兼季の姿を見て、その父実兼の左衛門督時代の面影に通う気持ちがあると、感慨を催す意味が一層明らかとなる。と言うのは実兼がその任にあつた時期が文永六年十二月から同年三月までだからである(『公卿補任』)。つまり二条は漠然と若き日の実兼を懐かしんだというのではなく、まさに実兼にとつて三年越しの恋が開始した年のことを偲んでいる。それは「新枕」を交わした文永九年から三年溯る文永七年のことであり、父雅忠が実兼に娘の将来を託そうと話を持ちかけた年であつた。作品開始時の文永八年はその翌年であり、実兼は雅忠の意向を汲んで、新しい年明けとともに二条にプロポーズの衣裳贈与をなしたのである。それ故二条はまさに左衛門督時代の実兼を想起して、その面影を息子兼季の上に重ねていたのである。これも「新枕」を三年越しの恋と解す証左となろう。

『とはすがたり』は作者の半生を素材にした日記文学とは言え、虚構性が強く、プロットと二条の実人生との関係がたえず問われてきた。しかし本稿ではまずテキストが語るところに耳を傾け、作者が作品を

どのように形象しようとしたのか、その点に耳を澄ますことを心掛けた。その結果、作者は巻一の作品スタート時点、ならびに父の没後〈曙〉と初めて契りを交わした時、巻三の「さしも新枕とも言ひぬべく、かたみに浅からざりし心ざしの人」と定義した時、更には巻五の実兼の左衛門督時代の回想シーン、いずれの場面においても、〈雪の曙〉を三年越しに二条に思いを寄せた〈新枕の人〉として、一貫して描いていることが判明する。と言うことは〈新枕の人〉としての〈雪の曙〉像は、単に巻一だけのものではなく、作品全編を貫くイメージであつたことを物語っている。

### 三、巻二の「雪の曙」——女楽事件の語り特性——

それでは次に作者が実際に使用した「雪の曙」という呼称について見ていこう。

この美しい名前の由来は、巻一の醍醐勝俱胝院における後朝の情景とされている。

ほの／＼と明くる空に、峰の白雪光合ひて、すさまじげに見ゆるに、 (巻一 43頁)

確かにここには雪の日の早朝の光景が述べられている。しかし「本文中からは必ずしも適切な命名契機をさぐり出せない」とのご指摘もあり、実兼詠歌、その他に典故を探ろうとする試みもある。「雪の曙」

を詠う実兼詠は、『新後撰集』の冬の歌が挙げられている。<sup>⑩</sup>

ながめてもいくとせふりぬたかまどの野がみの雪のあけほのの空  
(冬 五一九)

その他「或いは語られざる『雪』の初契りの後朝の、忘れがたい実兼の面影の形見か」との推測もなされている。

ここで作者の命名になる「雪の曙」の使用例を抜き出しておこう。

① 如法、御所よりも、あなたこなたを尋ねられ、雪の曙も、山  
く寺々までも、思ひ残す隈なく尋ねらる、よし聞けども、つ  
ゆも動かれず、  
(97頁)

② 雪の曙は、跡なき事を嘆きて、春日に二七日籠られたりけるが、  
(100頁)

③ 「略」と言ふを見れば、雪の曙也。  
(101頁)

④ 「略」など、言ひ定めて、雪の曙も今朝立ち帰らぬ。  
(102頁)

⑤ 又雪の曙より、茨切りたりし人の文あり。  
(104頁)

⑥ 女郎花の単衣襲に、袖に秋の野を縫ひて、露置きたる赤色の唐  
衣重ねて、生絹の小袖、袴など、色々に雪の曙の賜びたるぞ、  
いつよりもうれしかりし。  
(109頁)

使用例は6例。使用箇所は卷二の女楽事件(①)～(⑤)とその後日譚(⑥)である。場面の解説を少しく加えると、女楽とは『源氏物語』

六条院の女楽を模した遊宴で、二条はこの席で祖父四条隆親によりブライドを痛く傷つけられる。誇り高い彼女は即座に席を立ち身を隠すが、①～⑤は出奔した二条を捜し求める場面で用いられている。結局二条は「雪の曙」により見出だされ、叔父隆親の知らせにより後深草院に連れ戻されるが、残り1例はこの女楽事件と次の話題である今様伝授の狭間で用いられている。プロットを追うと、今様伝授に際して二条もお供を命じられる。が、失踪事件で衣裳もくたびれ果て、席次の争いで決裂した祖父隆親の後見も受けられず、その調達に困っていたところ、「曙」から衣裳が届けられた。⑥はその場面である。それ故この場面も女楽事件と無関係とは言い難い。一連の場面と見做してよからう。以後6例は、一続きの場面に用いられているとして、考察を進めたい。

ところで所謂〈雪の曙〉は作品開始とともに登場し、卷一・卷二においては後深草院とともに二条の心を二分する男性である。卷三では卷二から登場する高僧「有明の月」に押され気味だが、前半宮廷編を通じて彼の果たしている役割は大きい。にもかかわらず作者はこの仮名を卷二も後半のこの箇所に至るまで、用いようとはしなかった。しかもこの後も用いていない。明らかに作者はこの場面に限定して使用している。

それでは何故作者はこの場面にだけ「雪の曙」の呼称を用いたのか。①～⑥の「雪の曙」の使用場面を検討すると、場面の内容が、仮名の謂れと密接な関係を有するとは思われない。プロットの運びの上で

両者を結び付ける内的必然性を探ることは困難である。先に、本文中には「雪の曙」の適切な命名契機が探りだせない、というご指摘のあることを紹介した。しかし醍醐の後朝の情景は、「雪の曙」の言葉こそ用いていないが、紛れもなく雪の曙の光景である。この箇所を仮名の由来と見做し得ない理由は、本作において「雪の曙」という仮名の適切なる使用事由を見出せないが故に引き起こされている印象ではないだろうか。

結論を先取りするが、「雪の曙」という呼称は、呼び名の謂れに意味があるのではなく、又ストーリーと呼称の関連性からでもなく、或いは場面の内容的な必要からでもなく、愛人実兼を特定する記号として用いられた、と筆者は考えている。以下その点について些か言及する。

この女楽事件は伏見殿での催しと、二条出奔後の探索場面と二部構成になっている。前半は本人がその場にいるが、後半部分は主人公が席を立った後の伏見殿の様子や後日譚である。そこには二条不在の折の状況や本人が実際には関知し得ない「雪の曙」の動向等が詳しく記されている。その為作中人物二条の視点を越えた叙述が多く、それが本場面の特徴となっている。「雪の曙」の用例はこの後半部分に用いられているのである。中でも①②は完全に主人公二条の視点から離れた箇所で見られている。③④⑤⑥はそれに続く場面であり、①②と同一人物であると読者に示す為同じ「雪の曙」の呼称が用いられたのであろう。

本段だけに限定して用いられた「雪の曙」の呼称、ならびにこの章段に顕著に現れた、主人公の視点に囚われない物語的手法、これらを考え合わせると、作者が他の場面と切り離して、本段の実兼に「雪の曙」という呼称を与えた理由は、登場人物を記号化して語らねばならない語りの必然性にあつた、と考えるのである。

ここで眼を転じて仮名を用いない他の場面で、〈雪の曙〉がどのように呼ばれ、特定されていたかを見てみると、「思ひよらぬ人」「妻戸を忍びて叩く人」「そばなる人」等々、主人公二条との関わりにおいて呼び名が与えられ、むしろ多くは主語が記されず、述語だけで表されていることが、判明する。

筆者はかつて『とはずがたり』は回想日記でありながら、語り手の発話の基点を作品世界の「今日」に設定するという、独自の語りの構造を取っている事を論証した<sup>12)</sup>。つまり語り手の立つ発話時と作品世界の「今日」を一致させる事により、年老いた語り手が作品世界の主人公である自分自身に身を添わせて、今日の前に生起する出来事を語るという姿勢を取っているのである。当然語られる内容は主人公二条の体験・見聞が中心になり、主人公の視点から出来事が辿られることになる。主人公二条との関わりにおいて呼び名が規定された恋人は、作中人物二条の視点によって捉えられ、名付けられ、叙述されているということである。

それに対して主人公がその場にいたと思われない場面や、彼女が直截に関知しない出来事を語る為には、主人公の視点が捉える登場人物

でなく、主人公の視点から切り離され、読者が客観的に特定できる存在として命名されることが必要になる。それ故二条探索場面の実兼は実名を伏せた上で、しかも読者が客観的に人物を特定できる呼称を必要とした。「雪の曙」は、主人公二条によるのではなく、本段を語る語り手二条によって命名された呼称と言えよう。この呼称が、女樂事件のしかも二条出奔後に限って使用されたのは、本段の語りの特性の要請によるものである。

愛人実兼を表す記号として、「雪の曙」の呼称が選ばれたのは、巻一の雪の朝の景色が基になっていることはいうまでもない。と同時に、その選進に二条が深い関心を寄せて父の詠が選から漏れたことを歎いた『新後撰集』の成立後、そこに採られた実兼詠がヒントに成ったことは十分に考えられよう。

#### 四、その他の問題

##### 罪の子は昭訓門院か

二条と〈雪の曙〉との間に生まれた女子について、後の永福門院または昭訓門院を考える説がある。その当否について短く言及する。

\*

『女院小傳』によると永福門院は正応元年（一二八八）十八歳。誕生は文永八年で作者十四歳の年に当たる。つまり初めて院の寵愛を受けた年である。もし永福門院が作者の子供であるとすると、院の寵愛

を受ける以前に実兼との間に一子を儲けたことになる。この時父雅忠は存命中であり、二人が結ばれることにむしろ積極的であった。つまり院の意向が告げられる以前のことであり、彼らの婚儀には何の障害もなかったはずである。とすると、作品全体が完全にリアリティを失うことになるので、この説は受け入れがたい。

\*

次に昭訓門院であるが、諸注釈書は挙<sup>こ</sup>げて文永十年（一二七三）誕生説を採っている。これは恐らく『女院小傳』の正安三年（一一三〇）一）二十九歳説から逆算したものと考えられる。しかし『女院小傳』にはその年三十歳という注記があり、その上嘉元三年（一一三〇）には三十二歳であったともあり、更に四という注記も付されている。つまり昭訓門院の出生年次は三通り書かれ確定されておらず、最も早い文永九年（一二七二）から二年後の文永十一年（一二七四）までの間のことになる。もし最後の文永十一年説が採られるならば、まさに〈雪の曙〉との間に生まれた女子と誕生年次が合致することになる。

それでは昭訓門院の出生年次はいかにすれば確定できるのか。

以下はお茶の水女子大学大学院（史学専攻）の演習で『三長記』を担当された寺村綾子氏（現在星美学園高校講師）によってご教示戴いた（指導安田次郎教授）。研究成果は寺村氏の功績である。近い将来論文発表のご意思がないと伺った為、いずれ出産儀礼についてご論を纏められることを期し、本稿では昭訓門院の誕生年次の確定に限って、ご発表を最小限度紹介したい。寺村氏には記して深謝申し上げる。も

し至らない点があれば、その責務は標が負う。

昭訓門院は乾元二年（一三〇三）龜山院の皇子恒明親王を出産した。その折の記事は『昭訓門院御産愚記』（『公衡公記』三 史料纂集41）に詳しく、出産当日五月九日条には女院の装束が記されている。

次女院着御吉方御衣（御生氣方色青也、如単、端ヲ捻、）并御裳、  
 （白生二倍、如恒雜仕裳、但左右股立至于末不縫之、）（以下省略）  
 （一）括弧内は原文では割り注。

これによると女院は吉方の御衣を召され、その色は生氣（しょうけい）の青であることが判明する。

『二中歴』（『改訂史籍集覽』二十三）によると、

生氣（一云續命）求利、療病、遷移、皆百倍。又着其方衣（離朱、坤黄、兌白、乾紫、坎黒、艮紅、震青、巽緑）。養者、福德、宮百事吉慶。……………

とあり、方衣の青は震（卯、つまり東）に当たる。それに該当する人の年齢は「1、8、16、24、32、40、48、56、……」である。

この時の生氣を産婦でなく、新生児のものと考える説もあるが、もしそれが正しいとすれば、出産時に産婦が着する吉方御衣の色は全員新生児の青となる。しかしながら延慶四年（一一三二）二月廿三日の廣義門院のお産では、女院は「吉方御衣」として、緑色を用いている（『廣義門院御産愚記』『公衡公記』三）。緑は巽、「5、12、20、28、

36」の年の生氣である。廣義門院は延慶二年（一一三〇九）十八歳（女院小傳）、故に出産時に二十歳であり、緑は産婦の生氣であることが確認された。

とすると昭訓門院は恒明親王出産時、つまり乾元二年（一三〇三）には三十二歳である。よって女院の誕生は最も早い文永九年（一一二七）説が正しいと判明する。

文永九年は『とはすがたり』においては、父雅忠が発病し、八月三日に没した年である。この年二月雅忠は後嵯峨法皇の崩御に合い、それを悲しむあまり病に侵され、故院の後を追うことを望んだ。その闘病生活の中で娘二条の後深草院皇子懐妊を知り、その行く末見たさに、病氣回復を初めて願う様になる。しかしそれは叶わず没したのである。父の死、皇子懐妊は、作者の人生を決する程の重大事であり、かつ雅忠の没年は『公卿補任』と一致するゆえに、動かしようのない事実であった。それ故それ以前に〈雪の曙〉と関係があり、しかも雅忠没年に〈曙〉の女子の出産があったということは考えられない。仮にその子が昭訓門院であったと想定すると、女院の出生の秘密を隠すために出産年次を大胆に操作したことになる。となると作品の根幹に関わる内容が全くの虚構になり、『とはすがたり』の読みは根底から捉えなおしが必要となろう。故に昭訓門院説も成立しえないと考える。

よって二条と〈雪の曙〉の女子は、永福門院でも昭訓門院でもないことが判明した。残念ながら現在のところ不明といわざるを得ない。

〈雪の曙〉が巻四以降に登場しない理由

紙面が尽きたので、結論のみを記し、詳細は別稿に譲りたい。<sup>14)</sup>

本作の前半宮廷編は、巻三末尾の北山准后九十賀をもって閉じられる。その盛大な儀式を記した記事の中で、作者は前編を締め括るべく、〈雪の曙〉との秘められた関係を明るみに晒し、自らの手によって秘密の恋に終止符を打った。九十賀記の中で、〈雪の曙〉も「有明の月」も彼等の前編における役目を終えたのである。

それ故〈雪の曙〉こと愛人実兼が巻四以降に姿を現さないのは、作者の企図した構想によるものである。

## むすび

従来〈雪の曙〉という呼称は、愛人西園寺実兼を臚化・隠匿する為に用いられた仮名かめいと考えられてきた。しかし実際には作者はその呼称を巻二の特定な場面かみでしか用いていない。

本稿ではその場面の他と異なる叙述の特性を浮き彫りにし、「雪の曙」という呼称は、当場面の語りの特性が必要とし生み出した名称であり、主人公二条によってではなく、語り手である二条によって命名された呼称であることを明らかにした。

一方愛人実兼の人物造型に大いに与っているのが、古歌に詠まれ多くの歌人に愛された「新枕」という歌語である。その文学的源泉は『伊勢物語』二十四段にあり、「三年を待ち侘びて契りを交わす恋」の

意である。そのイメージは愛人実兼像として作品を貫いており、そこから、争点になっている巻頭の二条と実兼の関係も明かになった。

尚、『とはすがたり』本文の引用は新日本古典文学大系『とはすがたり たまきはる』（三角洋一氏 校注）に拠る。ただし表記は歴史的仮名遣いに改めた。

「新枕」の和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。

## 〔注〕

- (1) 「雪の曙」という呼称の使用例が6例であるという指摘は、すでに小沢良衛氏によってなされている。しかし小沢氏は巻一、巻二、巻三における呼称の変化を辿り、「雪の曙」という呼称の使用を巻二の特徴と捉えておられる点が、筆者と異なる理解である。

『とはすがたり』における雪の曙（女流日記文学講座第五巻『とはすがたり中世女流日記文学の世界』所収 勉誠社 平成二年5月）。

(2) 福田秀一氏『とはすがたり』新潮日本古典集成 昭和53年9

月

・井上宗雄氏・和田英道氏訳・注『とはすがたり』解説 創英

社 一九八四年3月

・次田香澄氏『とはすがたり（上）全注釈』講談社学術文庫

- 一九八七年7月
- (3) 岩佐美代子氏「『とほすがたり』における和歌と表現」(女流日記文学講座第五卷『とほすがたり中世女流日記文学の世界』所収 勉誠社 平成二年5月)。
- (4) ・久保田淳氏「『とほすがたり』完訳日本の古典38 小学館昭和60年4月
- ・三角洋一氏「『とほすがたり たまきはる』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九四年3月
- (5) ・宮内三三郎氏はこの箇所を「有明の月」と考えられた。  
「とほすがたり・徒然草・増鏡新見」明治書院 昭和52年8月
- ・福田秀一氏は宮内氏の有明の月説を否定しながらも、〈曙〉とは別な高貴な男のようでもあるとする。前出(2)頭注、解説
- (6) 拙稿「『とほすがたり』の人物考証―御匣殿・有明の月について―」『女子聖学院短期大学紀要』第十四号 一九八二年3月
- (7) 玉井幸助氏はこの箇所から〈雪の曙〉が西園寺実兼であると推定された。「問はず語り研究大成」明治書院 昭和46年4月
- (8) 当時は足掛けで計算した。
- (9) 岩佐美代子氏 前掲論文 注(3)
- (10) 次田香澄氏 前掲著書 注(2)
- (11) 岩佐美代子氏 前掲論文 注(3)
- (12) 拙稿「『とほすがたり』の手法―起筆部に見られる「語り」の姿勢―」『女子聖学院短期大学紀要』第二十九号 一九九七年3月、
- ならびに「『とほすがたり』の語りの独自性」『女子聖学院短期大学創立30周年記念論文集』一九九八年3月
- (13) 中島和歌子氏「院政期の出産・通過儀礼と八卦」『風俗』32―2 一九九三年10月
- (14) 拙稿「『とほすがたり』における北山准后九十賀記の位置付け―附・一日の始まりは何時か―」『緑聖文芸』第三十号 一九九九年3月



## Problems Regarding the Character of Yukinoakebono in *Towazugatari*

Miyako SHIMEGI

In this paper several unsolved problems concerning the figure of Yukinoakebono are discussed. This is a fictitious name for Sanekanu Saionji, who is an important character in *Towazugatari*. It is concluded that

- (1) The author, Lady Nijo, used the name Yukinoakebono in only one narrative scene, and
- (2) Her lover is described by the Japanese poetic word *niimakura*, which means that he has loved her for three years.

---

**Key words;** Figure of Yukinoakebono, Narrative Stance, Niimakura, Mitose, Relations between Nijō and Yukinoakebono